琉球大学学術リポジトリ

グローバル・コモンズ コンシェルジュ（GCC）活動報告

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構
	公開日: 2021-05-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 當間, 千夏
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48515

グローバル・コモンズ　コンシェルジュ（GCC）　活動報告

當間千夏（グローバル教育支援機構開発室）

平成 29 年度末、本学のグローバル人材育成事業を加速化させるためのプロジェクト、グローバル・プログラム津梁を 1 年間担当した後、私は途方に暮れていた。附属図書館に学内のグローバル取組を集約するためのスペース「グローバル・コモンズ津梁」を設置したはいいものの、実際にどうやって学生や教員が語学学習や留学、国際交流取組をするために集まるスペースにすればいいかが分からなかったからだ。その春、関西にあるいくつかの大学（京都産業大学、甲南大学、同志社大学）のコモンズと沖縄の名桜大学の SAKURAUM 内の言語学習センターを見学させていただき、その中で１つのヒントを得た。「コモンズを活発な場所にするにはそこで楽しく自発的に活動し、情報発信を行う学生が必要なのではないか。」訪問大学の取組よりいただいたその気づきをきっかけとしてグローバル・コモンズコンシェルジュを設置するに至った。

1. グローバル・コモンズ　コンシェルジュ（GCC）の目的

GCC は上で述べたとおり、附属図書館に設置されたグローバル・コモンズ津梁で国際教育活動が活発に行われることを 1 つの目的としている。同時に、グローバル・プログラム津梁で育成を目的としている「多様性を受容し協働する」グローバル人材育成の一取組として、本学学生の語学学習や海外渡航、国際交流をサポートすることを目的としている。

2. 名桜大学言語学習センター（LLC）について

GCC を考案・実施するにあたり、名桜大学の言語学習センター（LLC）における先駆的なチューター制度を参考にさせていただいた。名桜大学は、国内で初めてアメリカの CRLA(College Reading and Learning Association)のチューター研修認定制度を取り入れ、チューター学生自身が組織運営、チュータリング、ワークショップを実施する仕組みが確立されている。見学をさせていただいた際、チューター学生の方々に LLC を案内していただいたのだが、学生１人１人が自身の仕事に責任を持ち、生き生きと活動をしている姿がとても印象的だった。チューター研修認定制度を実施するには実施事項や活動時間など諸々の条件をクリアすることが必要なことから、残念ながら GCC では CRLA によるチューター研修制度を取り入れるには至っていないが、LLC のチューター制度のように、メンバーの学生が活動と組織運営を自律的に行うこと、メンバー自身が楽しみながら能力や経験を生かして活動し、成長できる場とすることを目指している。

3. 平成 30 年度の活動

GCC は平成 30 年度の 12 月よりパイロット運用を開始した。

学生リクルートは、留学や語学学習に興味のある学生、留学経験のある学生とのかかわり

を持つ英語学習アドバイザーメキュー律子先生にご協力いただき、海外経験や語学能力の高さに加え、他の学生のサポートに対して意欲的な学生 6 名を採用した。

3-1. 平成 30 年度活動内容

グローバル・コモンズ津梁に設置された GCC ブースに、平日 12 時～17 時の間シフト制でメンバー学生が 1 人常駐し、①カウンセリング（留学や語学学習の学習相談や相談内容に応じて必要な情報提供を行う）と②ワークショップ（メンバー学生が自身の経験や得意分野を生かして実施する）を実施した。

カウンセリングについては、開始月の 12 月より多くの学生の利用があったが、ちょうど交換留学の募集時期と重なっており、交換留学経験者の GCC メンバーに対して交換留学に関する相談やその面接に関する相談が多く寄せられた。春休みに入ってからもテスト運用として活動を実施したが、春休み中はキャンパスに来る学生の数自体が少ないこともあり、利用者数は少なかった。

ワークショップは各メンバーの経験や得意なこと、興味関心を活かして企画することとした。学期の終わりにはメキュー先生の実施する英会話セッション「ペラペラ団」をモデルにカジュアルな英会話を行うグループなど、メンバー学生からの自発的な企画の提案、実施も行われた。カウンセリングの利用者数推移、ワークショップ内容と参加者数は以下の通り。

表 1 GCC カウンセリング利用者数推移

月	12月	1月	2月	計
利用人数	26	17	6	49

當間千夏, 2019:74

表 2 GCC ワークショップ内容及び参加者数内訳

ワークショップ内容	参加人数
TOEIC座談会	9
メディアを使った楽しい英語勉強法	8
（模擬）模擬授業	15
ライティング＆スピーキング（試験形式）講座	3
アメリカ、スウェーデン留学体験談	7

當間千夏, 2019:75

3-2. 平成 30 年度の運営内容

GCC の取組は、カウンセリングやワークショップ等の活動を通して琉大生の国際教育をサ

ポートするだけではなく、活動の運営も含めて学生が自律的に実施することを目標としている。そこで、立ち上げの時点からどのように運営をするか、学生を中心にブレインストーミングや検討を行い、出来る限り学生が主体となって運営することを目指す仕組みづくりをした。そのために実施した主な事項は以下の通り。

・GCC アカウントでの Google drive での情報共有
　（チラシや日報、月間の利用人数報告など）
・定例ミーティングの実施（隔週）
・運営グループの発足（統括・広報・環境・戦略）

4. 令和元年度の活動

4-1. 令和元年度の活動内容

令和元年度前期はパラオ出身の交換留学生とセネガル出身の工学研究科大学院生 2 人を含む 10 人にメンバーを拡大して活動を開始した。

提供内容は、①カウンセリング業務 ②ワークショップ/スタディグループ/イベント実施に加えて、メンバーの提案により③英会話練習グループ（しばふ English)、留学生向けの④日本語会話グループ（しばふ Japanese）を追加した。③と④は留学生と日本人学生の両方を参加対象としており、国際交流も兼ねている。

カウンセリングについては、留学や資格試験、ワーキングホリデー、英会話など、相談のトピックは多様だったが利用人数は 1 年間で 25 名と昨年度よりも少なくなった。広報不足に加え、カウンセリング自体がそれほど必要とされていないのではないかということになり、今後の活動の重点を受け身のカウンセリングではなくメンバーによる発信・企画に置いてみることとした。

ワークショップ/スタディグループについては、6 件のワークショップと 1 件のスタディグループを実施した。ワークショップは、留学、語学、海外旅行、国際恋愛など、メンバーの個性に応じて多様な企画が実施された。また、TOEIC スタディグループや英会話・日本語会話練習グループを定期的に行うなど、ワークショップとは異なる学びの機会の多様性が加わった。特に英会話と日本語学習グループについては、GCC 学生主催でビーチパーティを学生同士で行うなど、参加者間でコミュニティ感が醸成されていた。その一方、初めての学生が参加しにくい等の課題もあった。ワークショップ/スタディグループ、英会話練習グループの参加人数は表 3 の通り。

また、令和元年度は日本リメディアル教育学会にて実施された学習支援チューターフォーラムに GCC 学生 1 名が参加した。本学の他には大手前大学、神田外語大学、名桜大学より学習支援チューターが参加しており、各大学の取組や課題について紹介し意見交換が行われた。

表 3　令和元年度 GCC 実施取組及び参加人数一覧

実施内容	参加人数
カウンセリング	25
芝生イングリッシュ	407
芝生ジャパニーズ	不明
交換留学ワークショップ	16
IELTSワークショップ	11
留学ワークショップ	3
海外旅行ワークショップ	5
留学と恋愛ワークショップ	7
英語勉強法ワークショップ	5
最強HIIT CAMP（英語学習WS）	57（のべ）
TOEICスタディグループ	不明

4-2. 令和元年度の運営内容

GCC スペースの整備

平成 29 年度はグローバル・コモンズ津梁に GCC ブースを設置したが、椅子と机を置いて、その周りに資料を並べていたため、複数人数で学生が集まる事が難しかった。そのため、グローバル・コモンズ津梁内に GCC が活動するためのスペースを設け、そこに人工芝を敷いて机、留学/奨学金等の資料を置き、学生達が資料閲覧や GCC の活動に参加する際に気軽に立ち寄れるスペースづくりを行った。その結果、芝生を利用して英会話練習グループや小規模なワークショップが実施されるようになった。本誌別稿グローバル・プログラム津梁活動報告でも報告しているとおり、「芝生の場所」として認知されるようになったことから、GCC の活動場所としての周知、イメージ付けにも効果があったと考えられる。

（写真左：平成 30 年度の GCC ブース活動　右：令和元年度の GCC スペース活動）

SNS 運用の開始

前年度の活動で認知度不足が課題としてあげられており、学生による SNS 運用

（Twitter/Instagram）を開始した。GCC メンバーの紹介や、実施取組の周知等についての投稿を行っている。令和 2 年 9 月 30 日現在の Twitter と Instagram のフォロワー数はそれぞれ 166 人と 178 人。SNS 以外の広報については、正課の語学講義や学内各部署との連携が不足しており、連携方法を検討する必要がある。

メンバーの拘束時間に関する課題とその解決法の検討

令和元年度末時点で、GCC のシフト時間やミーティングに時間が多忙なメンバーの負担となり、シフト制のままだとこのまま活動を続けることが難しいメンバーが多く出てきた。そこでシフト制ではなく取組ベースの方式を試すことになった。また、ミーティングも必要に応じて行うこととなった。

5. 令和 2 年度とこれから

令和 2 年度前期は新型コロナウィルスの感染拡大により対面活動が制限された。そのため、GCC でも 4 月よりオンラインでの活動を開始した。まずは出来るところから発信することを目標に SNS を通じておすすめの語学学習方法やサイトなど、学生が各自自宅でアクセス出来る活動を紹介した。その後、準備が整い次第 zoom や Google Meet 等を活用して順次活動を開始した。令和 2 年度前期の実施項目と参加人数は以下の通り。

表 4　令和 2 年度前期　GCC 実施取組及び参加人数一覧

実施内容（開催回数）	参加人数（のべ）
英会話練習グループ（計25回）	161
留学相談イベント（計2回）	6
交換留学オンラインイベント（計9回）	32
ワーキングホリデーオンラインイベント（計3回）	7
ゲームで英語を学ぼう	2
TOEIC学習グループ（計10回）	27

上記の取組に加えて学期の最後には留学生向けの日本語会話練習グループを開始した。また、世界展開力事業と共催で、国際交流と参加学生の国際情勢や多文化共生に対しての関心を醸成する事を目的とした留学生と日本人学生のディスカッションイベントを 2 回行いそれぞれ 12 人と 10 人の参加があった。

令和 2 年度前期の活動で良かったことは、不測の事態の中で早い段階からオンラインによる活動を開始することが出来たことである。コロナ渦で学生が自宅の外に出ることが出来ない時期に、大学や他の学生、英語や留学に触れる選択肢を 1 つ作ることが出来たのではないかと感じている。メンバー自身も ICT ツールを使い、工夫して活動を実施することで、

活動の幅を広げることができた。

反省点は、GCC 学生間でも、利用者と GCC の間でもコミュニケーションが不足したことである。対面だと自然にコミュニケーションを取っていた GCC メンバーが各々オンラインで活動を実施することで、良く言えば自立して、悪く言えば孤立して活動が成立した。その結果、メンバー間のコミュニケーションが大幅に減り、GCC の活動に対する意欲が小さくなったり、メンバー間の結束が弱まることとなった。また、オンラインでの活動となったことで参加者とメンバーの、また参加者同士のコミュニケーションも減少し、コミュニティ感が余り感じられなくなっているという声があった。

前期終了後、GCC メンバーとの個人面談を実施した。個人面談では、各メンバーの近況や、前期 GCC 活動の感想、GCC 活動に関する意見などを自由に述べてもらったが、この個人面談で気づいたことが二点ある。一点は、各メンバーが GCC においてコミュニケーションと自身の活動へのコミット不足を感じていたということ。もう一点は、GCC 活動で必ずしも必要ではない個人的な事柄やお互いの近況を話すことが一緒に活動をする仲間として重要なのではないかと言うことだった。面談をしたうち、数人のメンバーも個人的なコミュニケーションが必要ではないかと言及していた。

6. おわりに

GCC では令和 2 年度後期も前期同様オンラインでの活動がメインになる。このような状況の中で、以上で挙げたコミュニケーションの課題を解決するため、ミーティングやそれ以外のオンライン交流も含め、各メンバーに積極的にコミュニケーションを取り合うよう声をかけるとともに、メンバーからの提案で「GCC ショッキング」という 1 つの取組をはじめた。これは、もう放送されていないが有名なテレビ番組「笑っていいとも」のテレフォンショッキングを模したもので、ホストとなるメンバーがゲストとなるメンバーを指定し、2 人で zoom をしてお喋りをするというものだ。話題は何でも良い。セッションが終わると、今度はゲスト役がホストになり、別のメンバーを指定する。皆でミーティングや話をするのもいいけど、一人と深く話をすることによって、そのメンバーのことをよく知ることが出来ていい、と考案したメンバーは述べていた。以上のようにメンバー同士のコミュニケーションを増やし、GCC 活動を充実させつつ、学内での広報にも力を入れ、認知度を高めていきたい。

グローバル・プログラム津梁は令和 3 年度をもって終了する。本プロジェクトが終了した後、今後 GCC をどのような形で本学に残していくか、それが今後の大きな課題である。

参考文献

當間千夏(2019). 平成 30 年度 グローバル・プログラム津梁 プロジェクト報告
～多様性・協働性を核とした国際通用性のある体系的な学士教育の確立に向けて～, *琉球大学　大学教育センター報*, 22, 73-77.